

## 故右田卓君の人柄について

去る2011年2月26日、「過去の遭難に学ぶ」シンポジウム及び「故右田卓氏、故船原尚武氏、故天野弘善氏 追悼会」を開催し、その様子をacku.netに掲載しました。記事は会員向けでパスワードアクセスとしていますが、Googleなどのキーワード検索でアクセスできるようになっています。

梅雨明けの7月7日、石田有紀さんという方から理事の高田和三さんにemailがありました。

「突然のメール、失礼いたします。右田 卓先生について、ネットで調べていたところ、偶然に追悼会の記事を拝見しました。長年叶わなかった、右田先生に手を合わせてお礼を言う、といったことが実現できるかもしれないと考え、失礼を承知でメールさせていただきました。

私は京都市に在住の石田有紀、42歳です。京都府立高校に勤務しています。実は、私は神戸市立桜宮小学校で5年生までを過ごし、4年生の時に右田先生の担任のクラスに在籍していました。家庭の事情で、5年生の五月に徳島県へ転校し、その夏に右田先生が遭難されたことを、後から友人の手紙で知りました。手紙の中には、右田先生が撮ってくださった、私の写真もありました。

右田先生と過ごした4年生の一年間は、私にとっては宝石箱のように、すばらしい思い出のつまつた一年間で、今私が教員として生徒と関わっている、その原点は右田先生と過ごした時間であったと確信しています。大人になってからも、いつも私の中には右田先生との思い出が支えとなって存在し、なぜ、右田先生が外国の山で遭難しなければならなかつたのかということがずっと気になっていました。

神戸大学に問い合わせたところ、親切な方が、右田先生が遭難されたときの新聞記事を送ってください、そこではじめて右田先生が山岳会のメンバーで、夏休みに登山中に遭難されたことなど、詳しい経緯を知りました。

とりわけ心を打たれたのは、私たちを担任してくださったのが、教員生活初めてのクラスであり、一年間を通じて担任したのは私たちのクラスが最初で最後であるという事実でした。30年以上経った今でも、右田先生は私の心の中の先生として、生き続けています。毎年8月の末には、心の中で手を合わせています。

もし、できるなら、ご仏前で手を合わせてお礼を言いたい、ご家族の方に、右田先生がどれほどすばらしい先生であったかをお伝えし、お礼が言いたいと考えています。

ご迷惑かとは思いますが、私の長年の思いが実現できる機会を与えていただくことは可能でしょうか。どうぞよろしくお願い致します。 石田 有紀」」

高田さんから山田健事務局長にemailが転送され、山田さんが右田家との繋がりをつけました。

「石田有紀様

私は神戸大学山岳会事務局長の山田と申します。右田卓君とは大学の同級生です。このたびはすばらしい内容のメールをありがとうございました。右田君のご家族は、母上と姉上が神戸市垂水区に住んでおられます。また、姉上のパソコンのメールアドレスはこのメールの「写し」のとおりです。先ほど右田君の姉上に電話で貴方からのメールについてお伝えしたところ、大変喜んでおられました。

是非、連絡をさし上げてください。

早いもので今年の8月6日にはあの事故から丸31年経ちます。貴方のように未だに忘れずに居てくださる方がおられるということは、本当にうれしく思います。もしよければ、貴方のメールを当山岳会のホームページに載せたく思いますが、いかがでしょうか？もちろん電話番号やアドレスは伏せます。

山田 健」

「このたびメールを頂戴しました、京都の石田有紀です。メールは職場のパソコンからしか見られないので、返信が大変遅れ、申し訳ありませんでした。また、早速に右田先生のご家族に連絡をとっていただき、大変感謝しています。いただいたメールを何度も読み返し、これは夢ではないのだと自分に言い聞かせるのに時間がかかったほど、嬉しい気持ちでいっぱいです。また、山田様が右田先生の大学時代の同級生でいらっしゃるということを知り、感慨無量です。これから右田先生のご家族に連絡をとらせていただき、お話できる機会がもてればと考えています。

先日の私のメールを山岳会のホームページに掲載なさりたいというお話ですが、どうぞお使いくださいさればと思います。ほんのささやかなことでも、右田先生のお役に立てるならば嬉しい限りです。

最後になりましたが、メールを転送してくださった方にもどうぞよろしくお伝えください。取り急ぎ、お礼まで 7月13日 石田 有紀」

「山田様 メールありがとうございます。

弟が教師として生きた証をこのようなかたちで母と私が知ることができたのも、山岳会のHPのおかげですね。30年という時を経てなお、心のなかに弟を生かしてくださり、現在は教師となられた石田さんから、弟の教師時代の話を聞かせていただけるというのは、私たちにとって、弟からの30年目のプレゼントのようでとてもうれしく、また緊張もあります。 右田久美子」

Emailのやり取りから見えてくる右田卓君の卒業後の希望に満ちた教員生活と山への情熱、そしてなによりも教育者としての尊敬できる人柄が偲ばれます。

2011年7月15日 acku.net編集子